

1. 略歴

1997年4月	上智大学文学部英文学科 入学
2001年3月	同 卒業
2001年4月	上智大学文学部哲学科 入学 (3年次学士入学)
2003年3月	同 卒業
2003年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野修士課程 入学
2005年3月	同 修了 (修士 (文学) 取得)
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 進学
2006年6月	東京大学大学院人文社会系研究科 21世紀COE「死生学の構築」リサーチアシスタント (~2007年3月)
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」リサーチ アシスタント (~2008年3月)
2010年3月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学専門分野博士課程 単位取得退学
2010年4月	上智大学大学院哲学研究科 特別研究員 (~2013年3月)
2013年5月	東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター (上廣死生学・応用倫理講座) 特任研究員
2013年9月	博士 (文学) 取得 (東京大学大学院人文社会系研究科)
2014年4月	三重県立看護大学看護学部看護学科 准教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 特任准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

行為論、ケアの倫理、臨床死生学

b 研究課題

(1) ケアの倫理における「共感」と「認識をめぐる責任」についての哲学的分析とその臨床的展開

ケアの倫理における中心概念である「共感」に関して、その身体的・情動的側面を踏まえつつも、(これまで見落とされがちであった) その認知的・知性的側面を主題的に分析する。そのことを通して「共感」とそれに伴う「認識上の責任」を、臨床の場に即した複雑さと深みを備えたものとして理論化する。

ケアの倫理によれば、従来の功利主義的な生命倫理は、患者 (患者家族) の置かれている具体的な状況に関する「認識上の責任」(責任をもって認識すること) を果たしていない点で不十分だとされる。このような具体的な状況の認知において、共感が重要な働きをすることは疑いえない。しかし他方、共感には認知的なバイアスが働くことが指摘されている。そこで、共感 (共苦) の危うさや困難さを踏まえつつ、医療従事者—患者 (患者家族) 関係における望ましい共感のあり方と、それに伴う認識上の責任を明らかにする。

(2) 関係的な自律論の構築とその臨床的展開

ケアの倫理の立場から関係的な自律論を構築すると同時にその臨床的応用を試みる。生命倫理における個人主義的な自律論は、個人の独立性と他者からの不干渉を基調とする自己決定を核としてきた。それに対してケアの倫理は、人間の相互依存性と傷つきやすさに着目する。そして一定の依存関係や社会的環境の中で育まれるものとして自律を捉える。しかしながら、依存性と自律性は緊張関係にもあるため、個人主義的な自律論はなお根強い。そこで、自律性と依存性の諸相および自律性と依存性の結びつきについて徹底的に検討することを通して、関係的な自律論をより十全なものにする。そのうえで、医療従事者・患者・患者家族、それを取り巻く社会的/文化的環境という要素を考慮しつつ、関係的な自律の概念を、臨床における共同的意思決定プロセスに適用するものへと鍛え上げたい。

c 概要と自己評価

患者の病いの体験を理解するうえで、共感が重要な役割を果たすことは疑いえない。しかしながら、共感の役割は、常に肯定的なわけではない。とりわけ病いをめぐる「復帰の語り」に対する過剰な共感、病いに関する「混沌の語り」を、周縁化し排除する。その結果、ミランダ・フリッカーが「認識をめぐる不正義」と呼んだ問題が引き起こされる。病いによって打ちのめされる体験をした患者の証言は、極めて重要であるにもかかわらず、病いの

文脈における認識上の不正義のうちには、そういった証言の根本的重要性を否定するということが、中心的なものとして含まれている。そして、この不正義によって、患者の自尊心や主体性は深く傷つけられてしまう。

ここでの問題は、次の点にある。私たちは、前向きで未来志向的な患者に激しく共感してしまう。それによって、混沌とした苦しみの只中にある患者——絶望に打ちひしがれている患者——に対して共感的に配慮することが極めて困難になってしまう。この意味で、認識をめぐる不正義は「共感による不正義」として捉えることができる。

混沌の苦しみの只中にある患者は、「私の話に耳を傾けてほしい」という切迫したニーズをおそらく抱えている。にもかかわらず、共感による不正義によって、苦しみの体験について沈黙することを強いらられる。また希望など到底もてない状況であるにもかかわらず、前向きであるかのように振舞うことを余儀なくされる。もしくは、病いによって生じた過酷な現実について語るものの、その過酷さは、周囲の者によって些細なものとな見なされてしまう。おおよそこういった仕方、前向きな復帰の語りに対する、私たちの行き過ぎた共感、混沌の只中にある患者が人として尊重されることを阻むのである。

以上の点を踏まえ、認識／共感をめぐる不正義を是正するには、共感はどのように機能しうするのか、また機能しななければならないのかを考察した。とりわけ、「共感が認識上の責任を引き受けるものであるとき、その共感、病いに関する認識上の不正義に抗うメカニズムを、どのような形で備えていなければならないのか」を明らかにした。とりわけ、共感についての評価は、個人々の相互作用のレベルで評価するミクロな視点のみならず、社会的構造のレベルで評価するマクロな視点を含んでいなければならないことを指摘した。その成果を国際学会で発表した。

d 主要業績

(1) 書評

小西真理子、『共依存の倫理—必要とされることを渴望する 人々』、『社会と倫理』、第33号、2018.12

(2) 学会発表

国内、早川正祐、ワークショップ『身体知とケア』、「摩擦と試練を通じて身をもって知る—ケアにおける身体知の一側面」、第5回日本ソマティック心理学協会大会、2018.10.7

国内、早川正祐、「脆弱性をめぐる倫理の一側面」、哲学会第57回研究発表大会、2018.11.3

国外、Seisuke Hayakawa, “Rethinking Empathy as Shared Epistemic Responsibility in the Context of illness”, 5th East West Philosophers Forum: Extended cognition: how re-thinking cognition helps enlarge epistemology, The University of New South Wales, Sydney, 2019.5.1=Seisuke Hayakawa “Illness, Empathy, and Epistemic Responsibility,” Uehiro-Carnegie-Oxford Annual Conference 2019: Rethinking Bioethics in the 21st Century, The University of Oxford, 2019.5

国内、Seisuke Hayakawa, Katunori Miyahara (University of Wollongong), “Empathy and Epistemic Humility: A Receptivity-Based Approach” Keiai University, 2019.10.30

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、心不全チーム医療研究会、「臨床倫理の基礎——臨床倫理プロジェクトの考え方から」、2018.4

セミナー、第15回北海道臨床倫理検討会、「ケアの倫理——臨床における共感」、2018.5

セミナー、第6回臨床倫理セミナー in せんだい、「ケアの倫理——臨床における共感」、2018.7

セミナー、第7回北陸地区臨床倫理事例研究会、「ケアの倫理——脆弱性をめぐる倫理」、2018.9

セミナー、第7回愛媛地区臨床倫理事例研究会、「ケアの倫理——脆弱性をめぐる倫理」、2018.9

セミナー、第3回関西臨床倫理セミナー、「ケアの倫理——病いの語り」と共感」、2018.12

セミナー、第4回臨床倫理セミナー in ちくご、「ケアの倫理——病いの語り」と共感」、2019.3

セミナー、第7回臨床倫理セミナー in せんだい、「ケアの倫理——共苦から考える」、2019.7

セミナー、第2回北・北海道臨床倫理検討会「臨床倫理エッセンシャルズ：事例検討の進め方」2019.7

セミナー、第8回北陸地区臨床倫理事例研究会、「病いをめぐる語り——語りの身体的次元から」、2019.9

セミナー、第8回愛媛地区臨床倫理事例研究会、「ケアの倫理——語りの身体的次元」、2019.11

セミナー、第4回関西臨床倫理セミナー、「脆弱性をめぐる倫理」、2019.12

(2) 学会

哲学会、2003.4～現在

上智大学哲学会、2003.4～現在、同委員および編集委員、2010.4～2013.3

日本倫理学会、2005.8～現在

日本科学哲学会、2006.12～現在

日本哲学会、2006.12～現在

第25回日本生命倫理学会大会実行委員、2013.5～12
ケアの哲学学会、2016.9～現在